Osaka University Knowledge Archive

Title	トニカクの語史 ： 複合辞用法の成立過程
Author(s)	清田, 朗裕
Citation	語文. 2013, 100-101, p. 100-112
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/70912
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

トニカクの語史

―複合辞用法の成立過程―

清田朗裕

一　はじめに

本稿の目的は、「αハトニカク、β」という、指示語を構成要素にもつ形式の成立過程を、構文的特徴の変化に着目しつつ明らかにすることである。

現代語には、トニカクという副詞がある。

（1）　a初子はとにかく優しい。

　　b他の子はとにかく陽仁は可愛い。

（1a）のトニカクは、連用修飾する副詞用法であり、単独で用いられている。一方、（1b）は、「他の子」のことは話題の対象から〈除外〉されるものであり、ここでは「陽仁」が話題の対象であり、また「可愛い」という属性をもつことを表している。この（1b）は、トニカクの直前には休止や間投詞・終助詞等を置くことができないが、直後には置くことができるという特徴がある。

（2）　a＊他の子はとにかく陽仁は可愛い。[1]

　　b＊他の子はねとにかく陽仁は可愛い。

　　c　他の子はとにかく陽仁は可愛い。

　　d　他の子はとにかくね、陽仁は可愛い。

終助詞を置くことも可能なことから、二文として解釈することもできる。[2]

この構文的特徴から、（1b）の例は、「αハトニカク、β」という固定した表現であることがわかる。なお、αとβは共に明示されていなければならない。（1a）と形式的に区別がつかないからである。

このような表現は、トニカクの類義語であるトモカク・トモカクモにもみられる。

（3）　a他の子はともかく、陽仁は可愛い。

　　b他の子はともかくも、陽仁は可愛い。

意味の違いは認められるものの、構文的には「αハトモカク、

β」「αハトモカクモ、β」は、「αハトニカク、β」に等しい。「αハトニカク、β」は、ハとトニカクという複数の要素が結合し、ある種の辞として機能していると考えられるため、複合辞の一種だと考えられる。そこで本稿では、「αハトニカク、β」という形式を、トニカクの複合辞用法と呼ぶことにする。

二　先行研究

トニカクの複合辞用法についての詳細な議論は、管見の限りほとんどみられなかった。

現代語のトニカクについては、飛田・浅田（一九九四）、小池（他）（二〇〇二）や、類義語トモカクを取り上げた森田（一九七七）等といった辞書・事典類の記述が大半で、川越（二〇〇〇）において副詞用法が接続詞トコロデとの関わりの中で触れられている程度である。

「αハトニカク、β」という形式は、トニカクという副詞を含むものであるが、山崎・藤田（二〇〇一）や松木（二〇〇九）に挙げられている複合辞の具体例を分析的にみると、複数の助詞や動詞の組み合わせから構成されるものに限られており、副詞を含むものは挙げられていない。この点において、「αハトニカク、β」という複合辞は例外的な特徴をもっているといえる。

古代語では、トニカクはトニカクニという形で用いられていた。トニカクニは、「[[ト]ニ]＋[[カク]ニ]」と分析でき、並列複合語であったと考えられる。カクは古代語において中心的に用いられた近称の指示副詞であり、それに対応するトは、単独例はほとんどみられないが、引用の助詞トとの関わりと共に、指示副詞であったと考えられているものである（小林一九三六、此島一九六六、藤田二〇〇〇等）。したがって、トニカクニは、指示副詞ト・カクにそれぞれニが下接し、複合語化したものと考えられる。吉井（一九九三）は、トテモの語史を記述する際、「ト―カク―」という形式の中古・中世における結合度が、それ以降の時代に比べ、相対的に低く、様々な要素が入ることができたことを指摘している。

また、佐藤（一九八三）は、トカク系指示詞を取り上げる中でトニカクニの用例も挙げているが、複合辞用法に関する記述はみられない。

なお、迫野（二〇〇二）は、従来の指示詞研究が定称のコソアを中心に進められていることに対し、不定称のドや「ト―カク―」も含めて捉える必要があることを述べており、示唆に富む。

トニカクは、トとカクという指示副詞を構成要素にもつ複合語だと考えられる。しかし、現代語のトニカクは指示語として用いられていない。指示性の喪失が認められるのである。指示詞の歴史的変化という点からもトニカクは興味深い問題を有しているといえる。

三　問題の所在

古代語において、トニカクはトニカクニとして用いられていた

が、佐藤（一九八三）で挙げられている例をみると、複合辞用法の例はみられない。つまり、歴史的過程において、複合辞用法を獲得したことになる。この過程は、一応次のように捉えられる。

（4）［αハ　トニカク　述語句］＞
　　［αハトニカク（ノ）］［β　述語句］

しかし、（4）では、どのような変遷過程を辿ったのか明らかでない。本稿で明らかにするのはこの構造変化が生じえた過程である。

四　調査資料

トニカクのような語彙的な要素は、そもそも用例が少ないということや、特定の資料に偏在することが予想される。したがって、より多くの例を収集するため、主にコーパス資料を用いる。本稿では、国文学研究資料館による、『日本古典文学大系』（岩波書店）、『噺本大系』（東京堂出版）、ジャパンナレッジによる『新編日本古典文学全集』（小学館）、『CD-ROM 版　明治の文豪』（新潮社）のコーパス資料を用い、中古から近代にかけて、トニカク（ニ）・トモカク（モ）に該当する用例を検索・収集した。作品や用例が重複する場合は、基本的には『新編日本古典文学全集』の例を挙げた。

コーパス資料がない抄物や狂言等の資料については、索引をもとに収集したり、直接収集したりした。なお、近世前期の資料に当たる井原西鶴の作品については、『新編西鶴全集』（勉誠出版）があり、索引も充実しているため、コーパス資料ではなく、こちらを利用した。[3]

五　調査方法

本稿では、六節で示す現代語のトニカクの構文的特徴を参考に、古代語の様相を明らかにしながら複合辞用法の成立過程を辿っていく。その際、意味変化や指示性の喪失についても押さえていく。

古代語では、トニカクニという形であったため、トニカクニのニの脱落がいつ頃生じたのか、という点にも注意する。音形の変化は、意味変化、構造変化の前後に生じうるからである。

時代の区切りについては、トニカクニの初出がみられる中古から、中世前期（鎌倉）、中世後期（室町）、近世前期（宝暦以前）、近世後期（宝暦以後）、近代（明治・大正）、現代（昭和・平成）とする。地域差については、十分議論できるほどの用例が得られなかったこともあり、本稿では考慮しない。

六　現代語のトニカク

本節では、現代語の様相を押さえておく。

現代語のトニカクには、大きく、副詞用法、複合辞用法の二種が認められる。

そして現代語のトニカクの複合辞用法については、管見の限り、これまで詳細な議論はほとんどなされていないようである。飛田・浅田（一九九四）の辞書類や、川越（二〇〇〇）において、

副詞用法と共に考察されている程度である。そこで、これまでに指摘されているトニカクの構文的特徴に加え、複合辞用法のαとβに入る名詞句の意味論的関係について論者が確認したものを整理すると、次のようになる。

（5）副詞用法

Ⅰトニカク　＋　命令・意志

aトニカク　＋　命令

bトニカク　＋　意志

Ⅱトニカク　＋　事実・判断

c疑問表現　＋　トニカク　＋　事実・判断

d逆接表現　＋　トニカク　＋　事実・判断

e例示表現　＋　トニカク　＋　事実・判断

f除外表現　＋　トニカク　＋　事実・判断

複合辞用法

Ⅲαハトニカク、β

gαとβは意味論的に対義関係

hαとβは意味論的に類義関係

iαとβは意味論的な対義関係・類義関係なし

次のような例である。

（6）Ⅰaとにかく急ぎなさい。

bとにかくやるよ。

Ⅱc太郎は勝ったのか、とにかく試合会場に急いだ。

d怒られると分かっているけど、とにかく家出をした。

e夏休みはプールとか花火とか、とにかく遊んだ。

fA「阪大に合格できるかな」

B「とにかく、人事を尽くして天命を待つだけだ」

Ⅲg父はとにかく、母は授業参観に来た。

h林檎はとにかく、蜜柑は食べよう。

i本はとにかく、食品は買おう。

次に意味的特徴について確認する。トニカクは、飛田・浅田（一九九四）で「不確定の要素を無視する様子を表す」とあり、川越（二〇〇〇）では「「前件で述べたことの如何に関わらず、後件で述べるとおりである」と結論づける」とされるように、これまでの内容を〈除外〉することに中心的意味があるようである。この意味的特徴は、これまでの〈話題の流れを断つ〉ことにも繋がるため、その解釈の一つとして、トニカクの後件が、話題の〈結論〉を表すこともある。

この〈除外〉という意味的特徴は、副詞用法・複合辞用法共に認められる。

なお、トニカクには、話題の転換を表す接続詞として用いられる場合があることが指摘されている（川越二〇〇〇）。しかし、トコロデと比べ、「段落間、話段間の連接もすれば、文の中の成分の連接もおこなう」（川越二〇〇〇）ため、他の接続詞とはやや趣が異なっている。よって接続詞として用いられるようにみえる場合は、副詞用法のトニカクが文頭に現れたものと捉えておく。話題の転換も、前段落の話題を〈除外〉し新たな話題を取り上げ

るという面があるからである。

七　調査結果

七・一　量的分布

まず、今回の調査で得られたトニカク（ニ）の量的分布を示す。詳細は割愛するが、トニカク（ニ）と比較するため、類義語のトモカク（モ）の量的分布も併せて示す。

表一　量的分布

	トニカクニ	トニカク	トモカクモ	トモカク	計
中古	15	0	224	0	239
中世前期	14	0	44	0	58
中世後期	28	0	74	0	102
近世前期	15	7	59	0	81
近世後期	14	12	66	0	92
近代	6	318	134	17	475
計	92	337	601	17	1047
	429		618		

トニカクの初出は近世前期であることがわかる。[4] トニカクニは近世後期においても用いられているが、近代に入ると、トニカクが優勢になる。内省を働かせても、現代ではトニカクニを用いることはない。

一方、トモカクは、近代にみられるようになるが、この時代ではトモカクモの方が多くみられる。トニカクニと違い、トモカクモはトモカクに取って代わられることなく、現代においても共存している。[5]

七・二　構文的特徴

前節で、トニカク（ニ）・トモカク（モ）の量的分布を示した。本節では、トニカク（ニ）の構文的特徴の分布を明らかにする。現代語の様相から、まず複合辞用法以外のものを大きく副詞用法とし、副詞用法・複合辞用法に二分し、大まかな構文的特徴の分布を示す。

表二　副詞用法・複合辞用法の量的分布

	トニカクニ		トニカク		計
	副詞	複合辞	副詞	複合辞	
中古	15	0	0	0	15
中世前期	14	0	0	0	14
中世後期	27	1	0	0	28
近世前期	15	0	7	0	22
近世後期	14	0	12	0	26
近代	6	0	279	39	324
計	91	1	298	39	429
	92		337		

表二でまず目に付くのは、中世後期に一例、トニカクニの複合辞用法が確認できたことである。次の例である。

（7）「この袖枕、欺きくどき給ふとも、そのかいよもあらじ。いかなる人をも語らひて、憂きに別れし名残をも、慰み給へ」とすゝめられ、先立つ人（＝亡き妻）はとにかくに、残る憂き身（＝自分・夫）の悲しさよと、思ひごともよしなしとて、ともかくも御はからひとありければ、［…］

（『鉢かづき』、旧、六〇頁）

「先立つ人（＝亡き妻）のことはさておき、残された辛い我が身が悲しい」と解釈されるものである。「先立つ人」と「残る憂き身」が対比され、「先立つ人」については今は言及対象から〈除外〉する意が読み取れる。「αハトニカクニ、β」の形式といえる。このように、中世後期にトニカクニの複合辞用法が確認できるが、しかし、調査の限りにおいて、中古から近代を通じて、トニカクニの複合辞用法はこの一例に限られる。（8）に示すようにトモカクモには、中古の時点で複合辞用法がみられることを併せると、トニカクニとトモカクモの形態上・意味上の類似から誤写が生じたのかもしれない。判断に迷う例である。そのため、一応表には複合辞用法の例として挙げるものの、保留したい。

（8）ただ、さりぬべからむをりはともかくも、げにかばかりの折節には、深かりける頼み心に、もて省くべきにもあらず。

（『夜の寝覚』、新、三四五頁）

紙幅の都合上、前文脈を省略しており分かりにくいかもしれないが、「さりぬべからむをり（＝差し障りのない時）」と「かばかりの折節（＝宰相を起こしたくない今夜）」が対比され、「さりぬべからむをり」であれば来てよいとしても、今はそうではない「かばかりの折節」であることが述べられている。「αハトモカクモ、β」の形式である。

さて、表二から、近代にトニカクの複合辞用法が成立したことがわかる。そこで次節以降、複合辞用法成立の前代である近世と、近代に焦点を当て、トニカクの複合辞用法の成立過程を考察したい。本節では大きく副詞用法とした例にも、いくつかの文型があることを示し、その中から複合辞用法成立に関わる特徴があることを指摘する。

七・三　近世のトニカク

七・三・一　副詞用法の下位分類

近世において、トニカクは全一九例確認できた。前節ではこれらすべてを副詞用法と一括したが、本節では下位分類をおこない、複合辞用法への変化の過程に繋がる特徴がないか確認したい。まず、例を挙げる。

（9）aとにかく此世のものとは思はれず。

（『二休咄』、噺、二八〇頁）

bやう〳〵思案を定めても、兎に角涙はとゞまらず、気より病のさし起る、癪をおさへてゐたりける。

（『春色辰巳園』巻八、旧、三七〇頁）

（10）a［…］、人も泣かるゝわかれなりしが、心待ちするかたぐ〳〵とにかくかしがましとて、［…］

（『芭蕉翁終焉記』、新、四六一頁）

b正鵠はとにかく稀なりけり。

（『近世説美少年録』第二十四回、新、一二〇頁）

（11）左四「そう聞ましたよ。とにかく商人は不承勝ちだ。わしに任せて了簡さっしゃるがよい。

（『お染久松色読販』、旧、一九二頁）

（12）a作「ヤヤ最う往く〳〵。兎に角咄が長なつてならんハ。しからば、イヤ皆さんこれに（『浮世床』、新、二八七頁）

b何処の国にか物を小さくしてすむものか。おれは酒を呑むと兎に角万端気にか、つてならぬ。

（『酩酊気質』、新、一九八頁）

（9）は動詞述語を修飾する例、（10）は形容詞述語を修飾する例、（11）は名詞述語を修飾する例である。副詞は基本的に用言を修飾するものとされるが、トニカクは、形容詞述語・名詞述語にもみられる。属性叙述文と共起する例は全一九例中四例みられる。

（12）は、否定表現と共起する例である（（9）も）。このように否定表現と共起する例は、全一九例中八例と、約四割に上る。

以上のように、近世の副詞用法には、動詞述語文である事象叙述文だけでなく、属性叙述文とも共起すること、また否定表現と共起する例が多くみられることが分かる。

七・三・二　指示性の喪失

本節では、指示性の喪失についてみていく。

まず、トニカクニには、「あれこれと」という、複数の対象を包括的に指示する指示語として解釈できる例がみられる。現場や文脈中に指示対象がないため、観念指示用法の一つと考えられる。次のような例である。

（13）又人の智恵は、いかほどかしこくても限りありて、［…］、すべての人の料簡にはおよびがたき事おほければ、とにかくに世の中の事は、神の御はからひならでは、かなはぬものなり。

（『玉くしげ』、旧、三四〇頁）

ではトニカクには、そのような意味は認められるのだろうか。

（14）a今は二親のなげき給ふをはなせば、母の親、ことさらに恋しかりて、とにかく帰れとの仰せによつて、［…］

（『懐硯』巻二、西、一一頁）

bそれもおまへさん。遊びに参るならまだしもでございますか、意地のきたない人で、兎に角近所の娘御や何や角や、いぢり散しまして、人聞も悪うございますのさ

（『浮世風呂』二編巻之下、旧、一五一頁）

（14a）は、近世前期の例である。両親が嘆いていることを知り、母親の元に帰ろうとする場面であるが、この例のトニカクには、複数の対象を指示する意を読み取れない。つまり、トニカクには、その成立時から、指示性をもたない例が存在するということである。ただし、すべての例が指示性をもたないわけではない。

（14ｂ）は、近世後期の『浮世風呂』の例であるが、「あれこれと」近所の娘御等をいじり散らす様子が描かれている。とはいえ、この例においても、「何かにつけていぢり散らす」サマが甚だしいことを、トニカクで表していると解釈することもでき、複数の対象を指示するという本来の指示機能からは外れる例とみることもできる。

このように、近世においてトニカクは成立したが、指示機能をもたない例が、成立時にすでにみられる。

七・四　近代のトニカク

七・四・一　複合辞用法の初出例

前節までに、近世のトニカクは副詞用法に限られること、指示性をもたないトニカクの例が観察されることをみた。本節では、近代のトニカクをみていく。

まず、本調査において確認できた複合辞用法の初出例を挙げる。

（15）　ａさりとてお寺の娘に左り褄、お釈迦が三味ひく世は知らず人の聞え少しは憚かられて、田町の通りに葉茶屋の店を奇麗にしつらへ、帳場格子のうちにこの娘を据へて愛敬を売らすれば、秤りの目はとにかく勘定しらずの若い者など、何がなしに寄つて大方毎夜十二時を聞くまで店に客のかげ絶えたる事なし、（『たけくらべ』、明）

ｂ「それは御深切に難有う存じます。私はとにかく、間さんはこれからお美い御妻君をお持ち遊ばす大事のお躯でゐらつしやるのを、私のやうな者の為に御迷惑遊ばすやうな事が御座いましては何とも済みませんですから、私自今慎みますでございます」（『金色夜叉』、明）

（15ａ）は『たけくらべ』（一八九五―一八九六年）の例であり、（15ｂ）は、『金色夜叉』（一八九七―一九〇二年）の例である。つまり、トニカクの複合辞用法は明治二〇年代後半から三〇年代前半頃に成立したと考えられるのである。そこで以下、『CD-ROM版　明治の文豪』所収の作品を対象に、一八八〇年代から一九一〇年代まで、十年単位でトニカクの様相を示し、変化の過程を探っていきたい。

七・四・二　量的分布

調査の結果、動詞修飾用法・形容詞修飾用法・名詞修飾用法・述語用法・複合辞用法に分類できることが分かった。そこで、この分類に従い、一八八〇年代から一九一〇年代までのトニカクの量的分布を示すと、次のようになる。

表三　構文的特徴毎の量的分布

	一八八〇	一八九〇	一九〇〇	一九一〇	計
動詞修飾	8	7	99	93	207
形容詞修飾	1	6	18	8	33
名詞修飾	0	0	22	13	35
述語	0	1	3	0	4
複合辞	0	2	24	13	39
計	9	16	166	127	318

以下、用例を確認していく。

七・四・三　一八八〇年代

一八八〇年代には、次のような例がみられる。

(16)　a―自分は起上ッた。「どうするもんか！―と思ッた―とにかく顔だけは見て置いた、[…]（『めぐりあひ』、明）

b［…］、その後は、昇に飽いたのか、珍らしくなくなったのか、それとも何か争いでもしたのか、どうしたのか解らないが、とにかく昇が来ないとても、もウ心配もせず、来たとて、一向構わなくなッた。（『浮雲』、明）

(16) は動詞修飾用法である。(16 b) は否定表現と共起している。この点、近世の様相と変わらないようである。

七・四・四　一八九〇年代

一八九〇年代になると、次のような例がみられる。

(17)　a自分にも何が残念だか判らぬが、とにかく残念で残念で耐らぬ。（『片恋』、明）

b「それは、お若いでさう有らう。甚だ失敬ながら、すいぢや申して見やう。な。貴方もお若けりや間も若い。若い男の所へ若い女子が度々出入したら、そんな事は無うても、人がかれこれ言ひ易い、可えですか、そしたら、間はとにかくじや、赤樫様と云ふ者のある貴方の躯に疵が付く。そりや、不為ぢやありますまいか、ああ」（『金色夜叉』、明）

c「それは御深切に難有う存じます。私はとにかく、間さんはこれからお美い御妻君をお持ち遊ばす大事のお躯でゐらつしやるのを、私のやうな者の為に御迷惑遊ばすやうな事が御座いましては何とも済みませんですから、私自今慎みますでございます」（『金色夜叉』、明）

(17 a) は直前に否定表現と逆接の接続助詞ガがみえる例である。(5 II d) の例である。(17 b) はコピュラを伴い、述語句となっている例である。これは BCCWJ によってトニカクの例を検索すると、全七〇九八例中わずか三例しか観察されない用法である。最後に (17 c) は、複合辞用法の例である。

このように、一八九〇年代に複合辞用法の例がみられるようになるが、(17 b) のような、現代ではほとんど確認できないが、

確かに許容される特徴的な例がみられる。この例はトニカクが述語句として働く例であるが、「間のことはさておき」という「間」を考慮外に置く〈除外〉の意味が認められる。次のような構造をもつと考えられる。

(18) ［αハトニカクφじゃ］（。）［β…］。

つまり「αハトニカク、β」の、トニカクの直後に置くことができる休止部分が文末となり、二文で表されていると解釈できる。

七・四・五　一九〇〇年代以降

一八九〇年代にトニカクの複合辞用法の初出例が確認された。一九〇〇年代以降は、前節でみた構文的特徴をもつ例が多くみられる。

(19) a前から見えていたのか顔をあげる途端に見えだしたのか判然しないが、とにかく雨を透してよく見える。
（『琴のそら音』、明）

b折々は団扇でも使ってみようと云う気も起らんではないが、とにかく握る事が出来ないのだから仕方がない。
（『吾輩は猫である』、明）

c平岡はこの時始めて声を出して笑った。「若けりゃ猶結構じゃないか」「とにかく家の奴は好くないよ」
（『それから』、明）

d「貴女は能くそんな事を言うけれど、貴女に些とも悪い所はない、皆時が悪いのだ。が、まあ、それはとにかくさ、貴女がそういう訳で家を出たのなら、これはどうしても千葉へは遣れんねえ。
（『其面影』、明）

e山の眺めはとにかく、海の景色は晴れんけりゃ駄目ですなアなどと話合う。
（『浜菊』、明）

八　考察

前節までに近世・近代のトニカクに関する言語事実を記述した。それらをまとめると、次のようになる。

(20) 近世

a近世前期にトニカクの初出例が確認できる

bトニカクは、事象叙述文だけでなく、属性叙述文でも用いられる

c否定表現との共起例が約四割みられる

d指示性をもたない例が確認できる

近代

e明治三〇年前後から複合辞用法が確認できる

fコピュラを伴い、述語句となる例がみられる

(20)を基に、トニカクの複合辞用法の成立過程を考えたい。

まず、近世前期にトニカクの初出例が確認できることについて。中世まで「［トニ］＋［カクニ］」という語構成をもち、複数性が形態上確認できたトニカクニのニが脱落したことは、その複数性が意識されなくなったことの顕れである。そのため、近世前期に、指示性をもたない例が確認できるのである。トニカクニの複数性

とは、〈指示対象が複数ある〉という意味であり、ニの脱落は、〈複数〉を表す、という点を形態的に揺るがすものである。

次に事象叙述文だけでなく属性叙述文にも用いられることについて。近世において、属性叙述文にも用いられる例が確認できたことは、修飾先の範囲が広いということである。これは近代において、トニカクがコピュラを伴い述語句として用いられる例が確認できることと関わる。すなわち、次のようである。

(21) α は トニカク 名詞述語 ＋ ダ ∨

α は トニカク φ ダ

このように修飾先の述語が省略され、コピュラが下接する例は、ナカナカにおいてもみられる。

(22) この皿はなかなか（φ）だね。

ナカナカも事象叙述文だけでなく、属性叙述文でも用いられる副詞である（塚原二〇〇三a・二〇〇三b、渡辺二〇〇一の例を参照）。

すなわち、（2d）、（17b）で挙げたような、一文とも二文とも解釈できる述語化という過程を経ることによって、成立したと考えることができる。このようにみると、属性叙述文との共起が、トニカクが述語句となる契機を与えていると考えられる。

以上のことから、トニカクの複合辞用法の構造は、述語化という過程を経て、成立したと考えられる。

最後に、否定表現との共起について。近世のトニカクは、否定表現との共起が約四割に上った。このことは、複合辞用法の成立にどのように関わっているのだろうか。これは、〈除外〉の意味を獲得することに関わったと考えられる。すなわち、トニカクが否定表現と共起すると、トニカクニが担っていた「あれこれと」といった複数性を否定するという解釈が生じる。このような例が増加したために、トニカクニから引き継いだ〈複数〉を表すトニカクには、「あれこれVする対象がない ∨ Vする対象は何もない ∨ 対象について考慮しない」という語用論的推論が生じたと考えることができる。これが、現代語のトニカクの中心的意味である〈除外〉の意味獲得の過程であると考えられる。

九 まとめ

トニカクの複合辞用法の成立には、述語化という構文変化（拡張）、否定表現との共起による指示性の喪失に伴う〈複数〉の意味の喪失という意味変化が関わっていたことが明らかになった。

副詞は基本的には連用修飾という機能をもつ。その副詞が何らかの理由で連体修飾、また、述語化といった変化が生じた場合、大きな構造変化が生じる可能性がある。本稿は副詞の構造変化について、述語化という過程が介在したことを示したつもりである。このような現象は他にもみられることが期待される。手近な例を挙げれば、トニカクの類義語であるトモカク（モ）が同様の変化の過程を生じていると思われるが、詳細は別稿に譲りたい。

【付記1】本稿は、平成二十五年度大阪大学国語国文学会総会（二〇

一三年一月一二日）において発表した内容について、フロアより御意見・御教示を受け再考したものである。したがって、発表時とは内容が異なる点が多い。

貴重な御意見・御教示をくださった皆様に感謝申し上げます。

【付記2】本稿を執筆中、祖母山本初子が逝去した。学術論文上に記すことに躊躇いはあるものの、生前の故人への感謝を記したい気持ちが勝り、ここに記させていただく。ご寛恕いただきたい。

注

（1）「|」は休止を表す記号。

（2）一文としても、二文としても解釈できるということが、トニカクの複合辞用法の成立に関わったと考えられる。

（3）用例の出典は、次のように略記する。『日本古典文学大系』は「旧」、『噺本大系』は「噺」、『新編日本古典文学全集』は「新」、『新編西鶴全集』は「西」、『CD-ROM 版　明治の文豪』は「明」である。出典が特に明示されていないものは論者の作例である。

（4）『日本国語大辞典　第二版』（小学館）では、初出例と目されるものとして虎清本狂言の例が挙げられているが、論者が古川（一九六四）によって、該当箇所の影印部分を確認したところ、「とにかくに」とあり、誤りであることが分かった。

（5）トモカクモとトモカクの意味の差異については、飛田・浅田（一九九四）に記述がある。

【調査資料】読解の便を図るため、表記を一部改めたところがある。◆コーパス資料：【国文学研究資料館、http://base3.nii.ac.jp/】：『日本古典文学大系』（岩波書店）、『噺本大系』（東京堂出版）、【ジャパンナレッジ、http://www.japanknowledge.com/koten/displaymain】：『新編日本古典文学全集』（小学館）、『CD-ROM 版明治の文豪』（新潮社）、【国立国語研究所、http://nlb.ninjal.ac.jp/search/】『BCCWJ（現代書き言葉均衡コーパス）』◆狂言資料：池田廣司・北原保雄（一九七二―一九八三）『大蔵虎明本狂言集の研究本文篇』上・中・下（表現社）、内山弘（編）（一九九八）『天正狂言本　本文・総索引・研究』（笠間書院）、北原保雄・大倉浩（一九九七）『狂言記外五十番の研究』（勉誠社）、北原保雄・小林賢次（一九九一）『狂言六義全注』（勉誠出版）、北原保雄・吉見孝夫（一九八七）『狂言記拾遺の研究』（勉誠社）、東京都立大学中世語研究会（編）（二〇〇五）『狂言六義総索引』（勉誠出版）、古川久（一九六四）『狂言古本二種』（わんや書店）◆キリシタン資料：J・ロドリゲス（著）・土井忠生（訳）（一九五一）『日本大文典』（三省堂）◆抄物：岡見正雄・大塚光信（一九七一）『抄物資料集成　第一巻　史記抄』（清文堂出版）、岡見正雄・大塚光信（一九七一）『抄物資料集成　第二巻　四河入海（一）』（清文堂出版）、岡見正雄・大塚光信（一九七一）『抄物資料集成　第三巻　四河入海（二）』（清文堂出版）、岡見正雄・大塚光信（一九七一）『抄物資料集成　第四巻　四河入海（三）』（清文堂出版）、岡見正雄・大塚光信（一九七一）『抄物資料集成　第五巻　四河入海（四）』（清文堂出版）、岡見正雄・大塚光信（一九七一）『抄物資料集成　第六巻　毛詩抄・蒙求抄』（清文堂出版）、大塚光信（編）（一九八〇）『続抄物資料集成　第四巻　漢書抄』（清文堂出版）、大塚光信（編）（一九八〇）『続抄物資料集成　第五巻　古文真宝彦龍抄』（清文堂出版）、大塚光信（編）（一九八〇）『続抄物資料集成　第六巻　山谷抄』（清文堂出版）、大塚光信（編）（一九八〇）『続抄物資料集成　第八巻　百丈清規抄』（清文堂出版）、大塚光信（編）（一九八二）『続抄物資料集成　第九巻　日本書紀兼倶抄日本書紀桃源抄』（清文堂出版）◆その他：新編西鶴全集編集委員会（編）（二〇〇〇―二〇〇四）『新編西鶴全集』（勉誠出版）

【辞書・事典類】
◆土井忠生・森田武・長南実（編訳）（一九八〇）『邦訳日葡辞書』（岩波書店）◆中村幸彦・岡見正雄・阪倉篤義（編）（一九八二―一九九八）『角川古語大辭典』（角川書店）◆飛田良文・浅田秀子（一九九四）『現代副詞用法辞典』（東京堂出版）◆森田良行（一九七七）『基礎日本語　角川小辞典7』（角川書店）
【参考文献】
川越菜穂子（二〇〇〇）「「話題の転換」をあらわす接続表現について――「ところで」「とにかく」――」『帝塚山学院大学人間文化学部　研究年報』2、帝塚山学院大学
小池清治（他）（二〇〇二）『日本語表現・文型事典』明治書院
此島正年（一九六六）『国語助詞の研究――助詞史の素描』桜楓社
小林好日（一九三六）『日本文法史』刀江書院
迫野虔徳（二〇〇二）「指示詞におけるコソアド体系の整備」『語文研究』九四、九州大学国語国文学会
佐藤宣男（一九八三）「とかく（兎角・左右）」佐藤喜代治（編）『講座日本語の語彙11　語誌Ⅲできる～わんぱく』明治書院
塚原鉄雄（二〇〇三a）「「なかなかに」から「なかなか」へ」濱田敦・井手至・塚原鉄雄（編）『国語副詞の史的研究増補版』新典社（初出「『なかなかに』から『なかなか』へ」『大阪市立大学国語学研究調査冊子』第一冊、一九五四年）
塚原鉄雄（二〇〇三b）「「なかなか」の史的展開」濱田敦・井手至・塚原鉄雄（編）『国語副詞の史的研究増補版』新典社（初出「『なかなか』の展開」『大阪市立大学国語学研究調査冊子』第三冊、一九五五年）
藤田保幸（二〇〇〇）『国語引用構文の研究』和泉書院
松木正恵（二〇〇九）「複合辞研究史Ⅶ「複合辞」の体系化をめざして――認定基準の設定と複合辞一覧――」『学術研究（国語・国文学編）』五七、早稲田大学教育学部
山崎誠・藤田保幸（二〇〇一）『現代語複合辞用例集』国立国語研究所
吉井健（一九九三）「国語副詞の史的研究―「とても」の語史―」『文林』二七、神戸松蔭女子学院大学国文学研究室
渡辺実（二〇〇一）『さすが！　日本語』筑摩書房

（きよた・あきひろ　本学大学院博士後期課程）